

私の工夫

チームでつくる深い学びの授業実践

赤磐市立磐梨中学校

教諭 穂田 真俊



1 はじめに

授業で聞こえる「なんで水は凍ると体積が大きくなるの?」「お菓子の袋を宇宙に持って行くとうなるの?」という声。その一つひとつの疑問の解決に向けて全員で進んでいく。そんな主体的な姿が見られる授業を展開しながら、求められる資質・能力を育成していく。

現在、数学と理科の2教科を担当しており、その利点を生かして授業改善を行っている。また、学方向上担当として様々な取組を行っている。それらと授業との関係も含めて紹介したい。

2 深い学びの実践について

(1) 課題設定、見通し、ふり返りを重点化

課題の設定を閉ざされた問いから、開かれた問いへ転換した。「……ができるようになる」ではなく、「……にはどのようなすべばよいのだろうか」などとするこにより、学習活動に見通しをもつことができ、課題解決に向けた思考ができるようになる。また、一貫性のある発問により授業を展開することで、課題解決のプロセスを大切にしながら学習に取り組むことができる。そして、ふり返りの時間を活用することで、学習内容の確認や、自己変容の自覚、



数学の授業での学びあい

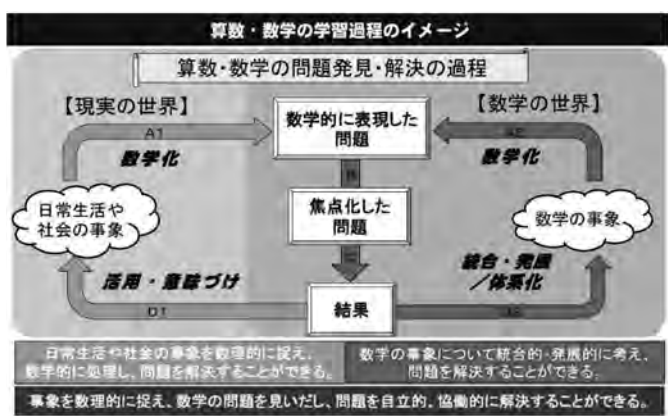
他分野との関係付け、一般化などが図れている。

生徒が「なぜだろう」「どうしてだろう」と考え続ける姿を求め続けたい。

(2) ユニバーサルデザインの視点をもった学習環境づくり

生徒に「分からないことがこの授業の宝物です」と呼びかけ、疑問に思ったことを素直に言える雰囲気をつくった。

叱ることも褒めることもしない「アドラー心理学」をもとに、生徒の意見を認め、安心感をもたせ



新学習指導要領解説 (抜粋)

(3) 教科横断的な視点をもった問題発見、解決の過程

数学の授業においても、日常生活の中で、生徒の意欲的な態度を引き出した。

そうした環境の中でこそ、グループワークや学び合いといった対話を取り入れたい。他の生徒に説明することで、知識や技能が構造化され、理解が深まる。また、他の生徒の意見を聞くことで、多様な情報を得ることができる。

活や社会の事象を課題として設定すると、生徒によってその興味の度合いや必要性に大きな差がうまれる。そこで、全ての生徒が取り組んでいる「理科の事象」を課題として設定した数学的活動を行った。理科の授業では、フックの法則の実験を行っている。その結果を、数学の関数の題材として活用する。ばねに加える力とばねの伸びが比例関係にあることから、理科で学習したことが数学の世界でも表現されることに気づくことができる。



理科の授業の様子

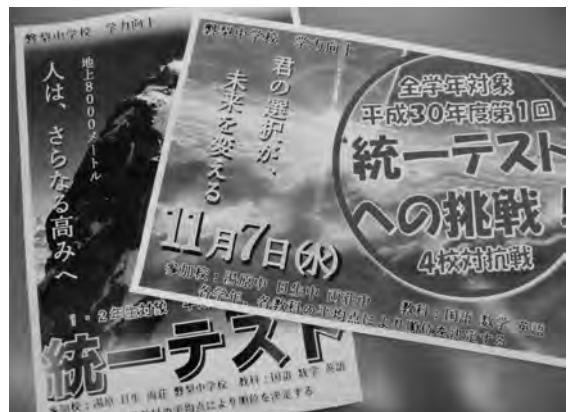
新学習指導要領では、数学の世界で数学的な課題設定をし、焦点化して解決する・現実の世界の事象を数学的に表現し、焦点化して解決する、という二つの学習過程サイクルをポイントにあげている。そのサイクルを変形し他教科とからめた授業実践を行っている。理科の学習で身に付けた力が、数学の学習でも活用できるのだと発見することは、生徒の学習意欲を十分に刺激した。逆に理科の学習場面でも同じことが言える。数学で身に付けた力を理科で活用するのだ。

教科の枠を越えて視野を広げることで、予測できない未来をよりよく生きていくために必要な力を身に付けることができる。

3 学校で取り組む学力向上とキャリア教育について

(1) 基礎学力の定着を目的とした学力向上

・国語・数学・英語の基礎学力の



統一テストのポスター

定着を図るため、他校と競争する「統一テスト」

・補充学習と合わせて基礎学力の定着を図る朝学「チャレンジタイム」

・生徒会活動と連携し、家庭学習の習慣化を目指した「自主学习ノート」の推進

(2) 各種学校や地域との連携を通じたキャリア教育

・学習意欲の向上をねらいとした「高校出前講座」や「私立中学との交流活動」

・将来への見通しをもたせる「専

門学校出前講座」や「各専門分野の講師による講演会」
・地域への愛着と貢献する心を育てる「磐梨感謝祭」

4 おわりに

生徒が生き生きと学ぶ姿が見られる授業は教師一人ではつくれない。「学び」は生徒自身が行うものであり、教師はその「学び」を支えている。担任が生徒の相談に乗ったり、顧問が部活動で共に汗を流したり、行事では生徒と一緒に考え、活動したりすることにより、生徒間や教師間、生徒と教師間のつながりが強くなった。

その信頼関係があるからこそ、深い学びの実現ができていのである。これからも、研究を重ね、生徒が生き生きと学べる場を設定していきたい。

人を大切にする、熱意をもつこと、自らが学び続けることを信念としながら、未来を担う子どもたちに向き合っていきたい。